

訂修新撰國語讀本 佐々政一編 卷十

3759
S219
資料室

41508

教科書文庫

4
810
41-1918
200030
1539

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

日六十月一年七正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

375.9
S219

文學博士佐々政一編



訂修
新撰
國語讀本



株式
會社
明治書院

訂修
新撰國語讀本 卷十目次

- 一 山路の菊……………一
- 二 山水のかた寫したる繪を見る……………五
- 三 芳宜園大人の靈を祭る……………七
- 四 人生終に奈何……………一二
- 五 苦痛と解脱……………一七
- 六 百蟲譜……………二五
- 七 古調新調……………三二
- 八 平安朝の文學……………三四

目次

九	枕草子抄	四三
一	春は曙	四三
二	にくきもの	四四
三	過ぎにしかたこひしきもの	四六
四	あてなるもの	四七
五	文	四七
六	人のこころ	四八
一〇	我が國の繪畫	五〇
一一	西洋の文藝復興と現代の日本	五七
一二	出 廬	六四
一三	赤壁の鏖戰	六七

一四	菅公の左遷	七二
一五	浪の花	七九
一六	小野の御室	八四
一七	受 發	八八
一八	幻住庵の記	九四
一九	風雅の道筋	一〇〇
二〇	近世の和歌	一〇三
二一	草木を愛し自然を喜ぶ上	一〇九
二二	草木を愛し自然を喜ぶ下	一一五
二三	上古の文學	一二〇
二四	天孫降臨	一二四

二五 奈良朝時代の詞藻……………一二九

二六 萬葉集の歌……………一三五

修訂新撰國語讀本 卷十 目次終

修訂新撰國語讀本 卷十



一 山路の菊

ある人、長月の九日に、今日は高きに登る日とて、奥まりたる山里に、年頃住む人の久しく音もせぬ訪らひがてら罷りけり。このもかのも千種の花ども皆移るひて、あるかなきかになりぬる中に、花薄の高やかにて、獨り残れる袂もいと露げげに見渡さるるなど、あはれ深き山路にもかかりけることと思ひつつ、入りもてゆくままに、道の邊近く流れたる谷

武陵桃源の故事

仙宮に菊を分け
て人のいたれる
かたを讀める。
「ぬれてほす山

川の水の音澄みていと清きが、物にも似ずいみじく芳ばし
きに、怪しくなりて、足も休めがてら暫し立ちやすらひて、思
ひ廻らせば、これやさは菊の雫の落ちつもありて、流れ來るな
らむと、桃の花ならねど、水上の尋ね見まほしくなりて、心ざ
しの所をば忘れて、この流につきて上るに、はかばかしく道
もなき岨傳ひを辿り行けば、いとどしく苦しくて、足も動か
れず侘しきを、わりなく念じつつ強ひて物するままに、思ひ
しもしるく、菊いと繁くある所に到りぬ。今を盛りと咲亂れ
たる花の色香は尙奥深くと、あながちに分入る程に、ひまな
く繁く散りかかる袖の露、打拂ふまにも千年をや經ぬらむ
と、かつがつ仙宮にも到れる心地さへぞしたりける。目もあ

路の菊のつゆの
まに、いつか干
とせをわれは經
にけむ。(古今
集、素性法師)



本居宣長

やに所せく匂ひ渡れる片つ方を見れば、巖の片傍に尻かけ
て、前なる流に目をすまして酒飲み居る人なむありける。い
みじく年老いて、頭に黒き筋なく、髯いと長くなど、すべてい
と神さびたるいといと怪しく、音
に聞く仙人といふ者にこそと、か
つはゆかしく、有様も聞かまほし
ければ、近くよりて、かく世ばなれ
て物深き山中に、獨りかくて物し
給ふはいかなる故にか。と問へば、のどやかに見上げて、こは
何處よりいかなる人のおはしつるぞ。翁はこの巖の中に、か
くて八千年の月日をなむ過しつるを、更に更に世の人の訪

かるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも。文の林世世に衰へ、言の葉の道日日に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機（二）の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟（三）にきだつくる輩、かれに泥み、ここにひかれて、尙あやしみとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世に盛りになりにたるなり。

その自らよみいで給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿とりどりに備はらざるはなし。その古を寫せるは、藤原寧

（一）宋人有耕田者。田中有株。兔走觸株、折頸而死。因釋其未而守株、冀復得免。兔不可復得。而身爲宋國笑。（韓非子）
（二）楚有涉江者。其劍自舟中墜于水。遽刻其舟曰。是吾劍所從墜也。舟止。入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。（呂氏春秋）

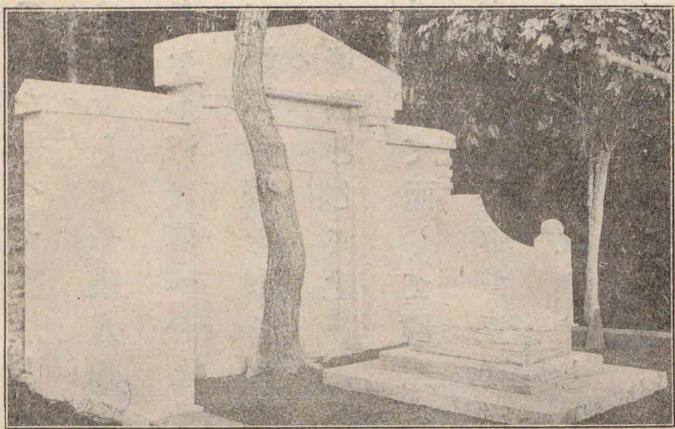
樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは、堀河鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さざることなく、目に觸るるものは言葉にのせざることなむあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今、黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、おほかたの世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かかるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下

にもさやかにきこしめし、天翔りても遙かに見そなはせと
なむ申す。(村田春海—琴後集)

四 人生終に奈何

人生終に奈何、これ實に一大疑問にあらずや。生きて回天
の雄圖を成し、死して千歳の功名を垂る。人生之を以て盡き
たりとすべきか。予甚だ之に惑ふ。生前一杯の酒を樂しむ、何
ぞ須ひむ、身後千載の名。人は只行樂して已まむか。予甚だ之
に惑ふ。蝸牛角上に何事をか争ふ、石火光中に此の身を寄す。
人は只無常を悟つて終らむか。予甚だ之に惑ふ。吁、人生終に
奈何。將た人は只死するが爲に生れたるか。



嘗て一古寺に遊ぶ。檐朽ち柱傾き、破壁摧欄、纔かに雨露を

凌ぐ。環堵蕭然として空宇人を絶ち、茫茫たる萋草晝尚暗く、古墳累
累として其の間に横はれるを見、
高 累として其の間に横はれるを見、
山 猛然として悟り、瞿然として歎ず。
標 吁、天下心を傷ましむる斯くの如
牛 きものあるか。借問す、これ誰が家
墓 の墳ぞ。弔祭永く至らず、墓塔空し
く雨露の爲に朽つ。想ふに其の生
れて世に在るや、冲天の雄志躍躍
として抑ふる能はず、天下を擧げて之に與ふるも心慊焉た

らざりし者も、一旦魂絶えて、身異物となれば、塔下墓陰、盈尺の地を守つて寂然として聲なし。人生の空然たる、哀むべきの至ならずや。後人碑を建て、之に銘するは、其の心素より英名を不朽に傳へむとするに在り。然れども星遷り世變り、之が洒掃の勞を取るの人なく、雨雪之を碎き、風露之を破り、今や塊然として土芥に委するも、人絶えて之を顧みず。先人の功名得て而して傳ふべきなし。思一たびここに至れば、彼の廣大なる墓碑を立てて名の不朽を願ふものは何等の癡愚ぞや。嗚呼、劫火爛然として一たび輝けば、大千且に壞す。天地又何の常かこれあらむ。想ふに彼の功業を竹帛に止めて盛名の竊まりなきを望むものも、其の癡之に等しきことなき

を得むや。

悟れ、一瞬の須臾なるも、千歳の久しきも、天地の無窮なるに比すれば、等しくこれ一刹那なるにあらずや。名その死と共に滅するも、死後千年を経て亡ぶるも、其の終あるに至つては一なり。人生を此の世に享け、一時の名を希ふ、五十年の目的遂に之に過ぎざるか。予甚だ之に惑ふ。

功名朝露の如し、頼むべからず。人生終に奈何。藐然として流俗の毀譽に關せず、優游自適、其の好む所に従ふ、これ樂は即ち樂なりと雖も、蟪蛄草露に終ると孰れぞや。栖栖遑遑、時を匡し、道に順ひ、仰いで鳳鳴を悲しみ、俯して、匏瓜を歎ず。之を估つて售れざらむ事を恐れ、之を藏めて失はむ事を憂ふ。

蟪蛄 不知三春
秋。(莊子逍遙
遊)
鳳兮、鳳兮、何德
之衰。(論語、微
子篇)
吾豈匏瓜也哉、
焉能繫而不食。
(論語、陽貨篇)

唐詩選に飲中八仙歌あり。劉伶、醉侯と稱せらる。

夸父不_レ量_レ力、欲_レ逐_二日影_一、逐_二之於隅谷之際_一。渴欲_レ得_レ飲、赴_二河渭_一。河渭不_レ足、將_三走_レ北飲_二於大澤_一、未至道渴而死。列子_二莊子_一。

これ正は即ち正なりと雖も、寧ろ鳥獸の營營として走生奔死するに等しきなきか。光を含み世に混じ、八仙の跡を尋ね、劉子の流を汲み、濁醪一引、俯して萬物の擾擾焉たるを望む。これ快は即ち快なりと雖も、醉生夢死、草木と何ぞ擇ばむ。人は空名の爲に生れたるか。將た行樂せむが爲に生れたるか。果して然らば、これ夸父日を追ふの癡を學ぶにあらざれば、禽獸草木と其の命を等しうせむとする者なり。予甚だ之に惑ふ。

南華老人は言へらく、大覺ありて、其の大夢なるを知ると、佛氏は諭すらく、離慾の寂靜は四諦を悟る所以なりと。已めよ、若し人生を以て夢となさば、迷へるも悟れるも等しくこ

觀_レ身岸額離_レ根草、論_レ命江頭不_レ繫舟。(和漢朗詠集)

れ夢にあらずや、縦ひ、身を觀じて岸頭離根の草とし、命を論じて江邊不繫の船となすも、期する所は一の墓門にあらずや。生前の事業夢中の影の如く、死後の名聞草葉の露の如くんば、茫然たる吾が生、それ何くにか寄せむ。大哀と謂はざるべけむや。嗚呼、人生終に奈何。往を顧み、來を慮り、半夜惘然として、吾、我を喪ふ。(高山樗牛)

五 苦痛と解脱

我が家の一羽の雞のいと逞しきが、偶劇しき熱を病みて、秋の一日の華やかなる庭面に黯澹たる影を投げぬ。彼は刻刻潮し來る焦熱の勢に抗し得て、尾羽うち枯して、

悄然庭の一隅に立てり。如何なるえにしあればか、藥爐の室にわが世の秋のわびしさを觀じつつある我は、そぞろに庭上の孤影に心動きぬ。

あはれ、我が友、あさましろも打衰へたるかな。昨日迄も光榮の華冕打翳して、曙の歌勇ましかりし雄姿、今何處にか認むべき。昂かりし頭は俛れ、麗しかりし冠は折れて、燃えのぼる満身の炎に、土の如き黝色傷ましく、嵐を嘲りし兩鬢は萎みて影の如く、敵を挫きし爪嘴は拳曲して力なし。生氣光澤人に迫るの力ありし渾身の羽毛は空しく枯藁を束ね、一雙の清眸は全く萬有より閉ぢぬ。昂然闊歩せし疇昔の姿永へに庭上に消えて、唯見る、衰殘の孤影蹒跚たり、蹠踉たるを。

嗚呼、汝、傷心の姿かな。さはれ友よ、苦痛は汝一人の事實なりと思ふ事なかれ、我亦ここに日夕枯瘦の影を撫して、秋に泣く身ぞ。同じ法界一味の汝と我と、やがては色身の籠、撒しては、相共に語るべき身の、共に免れ難きものは三界の生死流轉なり。されば我が法界の友よ、悲哀は汝一人の有ならず。我にも所詮は飲乾さでかなはぬ悲哀の杯あるものを。嗚呼、嗚呼、かくして汝と我と刻刻死といふ大魔王の威力の前に屈服しつつ、跪きつつ、喘ぎつつ、苦しみつつ、歩一步、暗黒無邊の底に沈みゆくなり。見よ、「生即苦」の三界の大事實は、ここに我等が前に火の如く躍現せるにあらずや。冷かなる、「死」の遍在力は、今や一粟の有情物に其の宇宙大の威力を集中し來

りて、直にその存在の根柢を摧破し粉砕せむとするにあらずや。

憐むべし、我等が衰殘の友は、此の大勢力に抗して今一たび戦きぬ。されど其の眼は再び開かず、其の首は再び昂らず、其の冠は再び耀かず、其の兩脚は再び砂を蹴ず、苦痛は一切を黙せしむ。その前には大地消え、萬有失せぬ。垣根に笑ふ花、庭の面に戯るる狗兒、晴を喜ぶ鳥聲、露を樂しむ蟲語、日光、樹影、雲色、水聲、すべて一樣、何の有る所ぞ。有る所は生死大海の流轉のみ、苦痛のみ、悲哀のみ。唯この沈痛なる一事實あるのみ。友なし、親なし、君なし、神なし、國土草木なし。嗚呼、汝かくして滅びむとするか、我も亦斯くして遂に滅び行かざるべからざるか。

見よ、わが有情の友は遂に此の自然の大破壊力の一撃に脆くも斃れぬ。同時に、我が自覺は、忽然として此の恐るべき威壓を反撥しぬ、我は覺醒しぬ。

我は叫びぬ、嗚呼、我等も亦かくして遂に冷かなる自然力の暴殄の下に、寂寞たる墳墓に入らざるべからざるかと。されど我が自覺は斷乎として答へたり。曰く、死の苦痛と共に其の自覺を有せざるものは、解脱なくして眠るを得べし。されど苦き苦き死の自覺を有する我等は、解脱なかるべからず、又實に解脱の權能あるべきなりと。嗚呼、これ何等天來の福音ぞや。我が有情の友、自覺なき友は解脱なくして逝きぬ。

されど我は遂に解脱なかるべからず、解脱あるべきなりと。嗚呼、これ何等祝福のおとづれぞや。

誰か死に面して苦痛の崇高を感ぜざる。而して誰か亦死の解脱力の我等にあるを自覺して、慰藉の崇高を感ぜざる。誠に人の脆きは、風にも傷む一もとの葦なり、しかもそは考ふる葦なり。嗚呼、考ふる葦の一語、世に是よりも人の偉大と高貴とを道破し得たるいみじき言葉あるべしや。それ、自然は其の強大を挾んで、吵爾たる我等に臨む。しかも我等は寧ろ我等の弱少其のものを光榮として誇らむとする一箇の或物を有するならずや。

* Pascal.
(1623—1663)
佛蘭西の哲學者。

* バスカルは更にいふ、人の孱弱其のもの其の偉大を證す、

そは無冠の帝王の孱弱なり」と。げに古來の英傑は、自家の弱きを頼みて昂然たり、死を味うて勝利を叫びたり。此に至りては、かの自然法、因果律の冷酷無慈悲も、能く何するものぞ。我等の解脱は能く我等を冷酷なる自然法、無慈悲なる因果律をさへ、甘しとして味はしむる力を有するならずや。因果の鎖は解脱哲學を縛する能はず、生死巖頭の自在を奪ふ能はず。因果は一葦の我を殺すべし、遂に考ふる葦の自覺を殺す能はざるなり。因果は曰く、「生は即ち死なり」と。自覺は曰く、「死は生の術なり」と。因果は曰く、「汝は大海の一粟なり」と。自覺は曰く、「自然は我が心の一波一浪なり」と。因果は曰く、「自然に従はざるを得ず」と。自覺は曰く、「我は自然に従はむとするな

(一) Mahomet. (576?-632) マホメットの教の開祖。
 (二) Spinoza. (1632-1677) オランダの哲學者。萬有神論の教を唱す。

り、是即ち上智なり、最勝善なり」と。

かくの如くにして、マホメットは一切服従主義を樹てて神に冥合し、かくの如くにしてスピノーザは萬物靜觀の法悦を享受しぬ。彼等の解脱力はよく因果其のものを我が當に行ふべき則となし、萬法は善なりと叫びぬ。彼等は因果以上の原理に躋舉して、因果の荒野を祝福の花野と觀じぬ。

嗚呼、我が法界有情の友、汝は苦痛といふ因果の下に永へに沈みゆきぬ。されど解脱を要せざる汝の一死、幸か不幸か。神ならぬ我等の如何で知るべき。唯、假初ならぬえにしによりて、我が精進の機たらしめし汝の一死こそ、貴き善知識にはありけれ。願はくは神よ、永へに汝が平和の眠を護れかし。

さらばなり、我が友。(綱島梁川―病問錄)

六 百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも啼く音を愛づるものならねば、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、(三) 莊周が夢もこの物には託しけぬ。

蛙は古今(四)の序に書かれてより、歌讀の部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁(五)の目覺したれば、この物のこと、さらにも誇り難し。蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やや日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶

(三) 昔者莊周夢爲蝶、栩栩然胡蝶也。俄然覺、則蘧蘧然周也。不知周之夢爲胡蝶、胡蝶之夢爲周歟。(莊子)

(四) 花になく驚、水にすむ蛙の聲をきけば、生きたし生けるものいづれか歌をよまざりける。(古今集序)

(五) 松尾芭蕉

やがて死ぬけしきは見えず、蟬の聲(松尾芭蕉)

胤(三)恭勤不(三)倦、博學多通。家貧不(三)常得(三)油。夏月則練蠶登(三)數十螢火、以照(三)書。以夜繼(三)日焉。(晉書、車胤傳)

とも、初蛙ともいふ事をきかず。この者ばかり初蟬といはるこそ大いなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えずと、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすたく。五月の闇はただこの者の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧(三)の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、この者の本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませ



蹟筆有也井横

楚國(三)薳舍、(漢哀帝の時の人)初隨楚王(三)朝、宿未央宮。見(三)蜘蛛大如(三)栗、四面縈(三)羅網、有(三)蟲觸(三)之而死。舍乃歎曰、吾生亦如此耳、仕官者人之羅網也、豈可(三)淹(三)歲。於是挂冠而退、時人謂之爲(三)蜘蛛之隱。(金樓子)

ざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはこの眞似すべからず。日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくつくほうしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死してこのものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。もろこしのむかしには、退隱(三)の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の初として、頼光をさへおびやかしたるいとおそろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒の、蟬の羽などかけ捨てたるは、いささかあはれ添ふる折

もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道に
 ちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかていふやらむ。
 蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこ
 がすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ず
 きの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、
 こがね蟲はいやし。

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東
 西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、
 その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴を營
 みて、千丈の隄を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒

淳子券、醉夢入二
 大槐安國、見
 王。王曰、吾南河
 郡、屈、卿爲守
 居凡廿載。使者
 送田穴、遂歸。
 尋古槐下蟻穴、
 洞然明朗、乃槐
 安國。又一穴直
 上南枝、即南柯
 郡也。異聞集
 千丈之隄以二蠅
 蟻之穴一潰。韓
 非子

憎着蠅一賦あり。
 隣紙魚一詞あり。

欲下以二蟪蛄之
 斧一禦一陸車之
 隣。文選

駿河國駿東郡。
 同國富士郡。

に噛まるる蚤はたまたまにして、猿の手にさぐらるる虱は
 逃るること難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家
 もちたれども、行く先先をおひ歩くは、雲水の安きにも似ず。
 蛇・蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは
 不用の事なり。

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつな
 り。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。ただ原吉原を駕に
 のりて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・響蟲はその音の似たるを以て名によばる。松蟲

(一) 秋風にほころびぬらし、藤袴つづりさせてふきりぎりすなく。

(二) 古今集、在原棟梁

(三) あまの刈る藻にすむ蟲のわれかちと、音をこそななめ世をば恨みじ。(古今集、藤原直子)

(四) 蓑蟲：八月ばかりになれば父よ父よとはかなげに鳴く、いみじくあはれなり。(枕草子)

のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、ひとり後生をねがひ、ひとり殺生を事とす、これ松蟲のたぐひなるべし。
きりぎりすのつづりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻に棲む蟲は、われからとただ身の上を歎くらむを、蓑蟲のちちよと呼ぶは、母をば慕はて、など父をのみ戀ふらむとあやし。蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげ

しきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。
(横井也有一鶴衣)

七 古調新調

(五) 老莊、所興交者唯阮籍、山濤、預其流者、向秀、劉伶、阮咸、王戎、爲竹林之遊。世所謂竹林七賢也。(蒙求)

元朝や、神代のこともおもはるる。

(五) 荒木田守武

手をついて歌申し上ぐる蛙かな。

(六) 山崎 宗鑑

冬籠り、蟲けらまでもあなかしこ。

(七) 松永 貞徳

お静かに御座れ、夕陽未だのこんの雪。

(八) 西山 宗因

青麥や、雲雀があがるあれさがる。

(九) 上島 鬼貫

夕涼み、よくぞ男に生れける。

榎本 其角

黄菊白菊、その外の名はなくもがな。

服部 嵐雪

岩端や、ここにもひとり月の客。

向井 去來



牛叱る聲に鳴たつゆふべかな。

各務 支考

長松が親の名でくる御慶かな。

志田 野坡



鶯や、下駄の齒につく小田の土。

春花園 凡兆

卯の花に蘆毛の駒の夜明かな。

森川 許六

鍬さげて叱りにでるや、桃の花。

岩田 涼菟

以下七句は天明前後の調。

山路来て向ふ城下や、風の數。

炭 太 祇

馬借りて、かはるがはるに霞みけり。

大島 蓼太

曉や、鯨の吼ゆる霜の海。

加藤 曉臺

霧深し、何呼ばりあふ岡と舟。

高井 几董

美しや、春は白魚かいわり菜。

加舎 白雄

枯葦の日に日に折れて流れけり。

高桑 闌更

秋來ぬと目にさや豆のふとりかな。

大伴 大江丸

尻べたの蚊をうつ芋の葉風かな。

建部 巢兆

東海道残らず梅となりにけり。

夏目 成美

名月や、江戸のやつらが何知つて。

小林 一茶

秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬ。(古今集、藤原敏行)
以下化政度前後の調。

八 平安朝の文學

平安朝は支那文化の次第に我が文化と融合したる時代にして、我が特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なり。就中文學上に最大の關係を有するは假名文字の製作なりとす。かの奈良朝に於ては、漢字を音韻文字として使用せしも、この時代に及びて、或はこれを草體にし、或はその扁旁を省きて、所謂假名文字となせり。これによりて純國文學はますます發達し、當時の建築、彫刻、繪畫等と等しく特殊の光彩を放ちて、強大なる支那文化にも壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。

假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは文徳清和

千五百年代の前半。

以後にあらむか。この頃より、韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。而して和歌の發達と、これが翫賞とは、あらゆる文學の根柢をなせるが如し。

延喜の朝、始めて和歌敕撰の舉あり。古今集ここに於て成る。古今の歌を取りて萬葉のに比すれば、その内容の増加せること最も著し。萬葉の歌には直覺の情を歌ひ、眼前の景色を敘せるもの多し。古今のは俯仰感懷、人生の無常を敘し、浮世の夢の如きを説く。三十一文字の歌體としては頗る豐富なる内容を收め得たりと言はざるべからず。これ佛教思想と六朝詩賦の思想とを短歌中に移植したればなり。造句の

延喜五年。(三五)

法も古今に至りては修辭上の進歩著しく、譬喩・縁語・掛詞等最も巧妙に使用せらる。萬葉集は初心なる趣ありて簡古の味に富み、古今集は巧緻の境に進みて勁健の趣なし。自然と人生との融合はこの時代に至りて全く完成し、春花・秋葉・雪月の美など、歌に詠すべき題目は多くこの時代に確定せられ、春の鶯、夏の郭公、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物も亦自ら一定し、春の花の盛りには人生の樂しき朝を思ひ、萩の上の露にははかなく消ゆる死の運命を悲しむ。和歌の約束悉くここに成立して、後の文學は皆これに則るに至れり。

紀貫之は國文を以て始めて日記を記し、又大井河行幸和歌序を記し、敕撰古今集の序文を作れり。これ假名文・漢文竝

(一)西三ノ六〇
(二)西三ノ六〇
土佐日記

行の新例を開けるものにして、貫之が見識の高き、功勞の大なる、實にこの點に存す。然れども貫之をしてここに至らしめたるは、亦時代の影響に外ならず。さればこれより以後、所謂草子物語の類は鬱然として起れり。就中最も有名なるを源氏物語とす。

源氏物語前後五十四帖、前篇は光源氏を主人公として、その得意の狀を寫し、後篇の宇治十帖は薰大將を主人公として、その失意の樣を敘す。全篇の腳色整然として紊れず、主人公を圍繞せる各種の人物の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。蓋し源氏の大作家たる所以は、描寫せる人物が活躍せると、自然を描ける文辭が絢爛精妙なるとに

(三)紫式部の作。(一六〇〇年代)

あり。人事の描寫には必ず自然の背景を添ふ。上古以來人事と自然とを融合せる詩的思想は、ここに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず歌の情景を含めり。若しそれ散文としての外形より見むか、純國語として最も發達せる種種の形式を發見するを得べし。故に和歌に於て古今集が模範文學となりしが如く、國文に於ては源氏物語が後世の模範文學となれり。

源氏物語と相並びて國文の雙璧となへらるるは清少納言の枕草子なり。枕草子の妙はその隨筆たる點にあり。忽にして人事、忽にして自然、或は公事を評し、或は人物を評し、或は自ら誇り、或は皇后を褒むるなど、閱讀の際多種の事件

*
六〇年代の人。

に遭遇して殆ど應接に遑あらざらしむ。その變化、その錯綜ここに始めて全篇の妙味を成し來る。一篇の文章の妙味も亦句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽にして倒置、省略、忽にして枕詞、掛詞、その變化轉換の妙、人を魅するものあり。枕詞、掛詞の妙味は、元來人をして一事を思念せしめて直に他の事物に轉ぜしむるにあり。枕草子の文は即ちその手段の最も發達せるものなり。ある事柄に執著固定せずして、多方面の興味を惹起すの妙機を捕へ得たる所以は、即ちその文の輕妙洒脫の氣を帶ぶる所以なり。この點に於ては後世の俳家に似たる所あり。かの徒然草は枕草子を粉本とせるもの、しかもその文章の變化は到底これに及ばず。頓才機智

を弄ぶは、當時の和歌の贈遣に於ける特徴として、當時の人の最も苦心せる所なり。清少納言は才氣奔放、當意即妙の才に富めり。その性質の最もよくこれに適したるものなり。語を換へていへば、直にその時代の性格を代表せる人物といふべし。その觀察の奇警鋭敏なる、人の言はむと欲して言ふ能はざる所を言ふ、眞に得易からざる才筆と謂ふべし。

榮華物語は全篇四十帖、要は關白道長^{*}が一代の榮華を寫せるものなり。この書一名世繼物語と稱せしは歴史物語といふにひとし。歴史と稱すといへども、宮廷の歴史なり、後宮の寫實なり。この點に於ては、假構物語といくばくも異ならず。物語の名も亦ふさはしといふべし。文學上の價值より見

^{*}藤原氏。(二六六一—二六七)

れば、大鏡は遙かに榮華の上にある。その體裁は史記に倣ひて列傳體を取れり。而して藤氏の榮華を寫すは全く榮華に等し。その文やや勁健にして筆端褒貶の意を含めり。疑ふらくは男子の作なるべし。この二者は平安朝の掉尾の文學として、藤原氏最後の榮華を寫せるものなり。

平安朝は平安の都の今を盛りと榮えたる時代にて、上流の紳士は、詩歌に、音樂に、舞蹈に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を曳きて頻繁なる年中行事に仕へしは如何に優美なりけむ。それらの面影は各種物語の上に想見すべきものなり。しかも最もよく平安朝の上下の事情を見るべきものは今昔物語に若くはなし。今昔物語は、女流の手に成れる

物語にあらず、文學の書にあらずして、印度・支那・日本にわた
りて種種の傳説を集めたる書なり。嘗に我が國の傳説を知
る上に於て珍書たるのみならず、世界傳説研究上至大の寶
たり。儒佛二教の傳來と共に、種種の傳説・童話も亦輸入し來
り、僅かにその人とその處との名を改めて日本化せるもの
甚だ尠なからず。凡そ我が國佛教渡來以前には、因果應報の
談もなく、輪廻轉生の話もなく、禽獸・妖怪の談もなかりき。此
等は皆佛教とともに傳はり來りたるものにして、佛徒の法
を説くや、常に恐ろしき因果話を以て印度・支那の舊話をそ
の儘に説けり。平安朝の國民が神經過敏ともいふべき恐怖
心に富める文弱の風を養成せしは、佛徒の説教與りて力あ

Classical age

古典時代。

りと謂ふべし。鎌倉以後に至りて、此等の説話は皆文學の中
に吸収せられ、一面より見れば、大いに我が文學をして豊富
ならしめしもの、今昔の中にその淵源を探り得べし。されば
平安朝の世は嘗に文學に於てクラシカル・エージと稱すべ
きのみならず、傳説に於ても亦實にクラシカル・エージとい
ふべきなり。(芳賀矢一「國文學歴史代選」に據る)

九 枕草子抄

一 春は曙

春は曙。やうやう白くなり行く山ぎは少しあかりて、紫だ
ちたる雲の細く棚引きたる。

夏は夜。月の頃はいふも更なり、闇の夜もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日華やかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥の寢所へ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まして雁などの列ねたるがいと小さく見ゆる、いとをかし。日入り果てて、風の音、蟲の音など、いとあはれなり。冬は曉。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白き、又さらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、火鉢・火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわるし。

二 にくきもの

いそぐことあるをりに長ごとするまらうど。あなづらはしき人ならば、のちになどいひてもおひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いにくし。

硯に髪の入りに磨られたる、また墨のなかに石こもりてぎしぎしときしみたる。

物羨みし、身の上なげき、人の上いひ、つゆばかりの事もゆかしがり聞かまほしがりて、えしらぬをばえんじそしり、又僅かに聞きわたる事をば、われ固より知りたる事のやうに、こと人に語るもいにくし。

物聞かむと思ふ程に泣くちご。鳥の集まりて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそごゑに名

のりて、顔のもとに飛びありく、はかせさへ身の程にあるこそいとにくけれ。きしめく車に乗りてありくもの、耳も利かぬにやあらむといとにくし。

物がたりなどするにさしてて、われ一人さかしがる者、すべてさし出は、わらはもおともいとにくし。昔物語などするに、我知りたりけるは、ふと出でて言ひくたしなどするいとにくし。

あからさまに來たる子ども、わらはべをらうたがりて、をかしき物などとらするに、なれて、常に來て居入りて、調度など打ちちらしぬるにくし。

三 過ぎにしかたこひしきもの

かれたるあふひ。ひひな遊のてうど。ふたあるえびぞめなどのさいでのおしへされて、草紙のなかにありけるを見つけたる。又をりからあはれなりし人の文、雨などの降りてつれづれなる日さがし出でたる。こぞのかはほり。月のあかき夜。

四 あてなるもの

うすいろにしらがさねのかざみ。かりのこ。けづり氷のあまづらにいらりて、あたらしきかなまりにいらたる。すゐさうのずず。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじうつくしきちごの覆盆子くひたる。

五 文

めづらしくいふべき事にはあらねど、文こそ猶めてたきものなれ。遙かなるせかいにある人の、いみじくおぼつかなく、いかならむと思ふに、文を見れば、只今さしむかひたるやうにおぼゆる、いみじき事なりかし。わが思ふことを書きやりつれば、未だ彼處あそこまでは行きつかざらめど、心ゆく心地こそすれ。文といふ事なからましかば、いかにいぶせくくれふたがる心地せまし。よろづのこと思ひ思ひて、その人の許へとて、こまごまと書いてやりつれば、おぼつかなさをもなくさむ心地するに、まして返事見つれば命をのぶべかめるげにことわりなりや。

六 人のこころ

なが月ばかり、夜一夜ふりあかしたる雨の、けさはやみて、朝日のはなやかにさしたるに、前栽の菊の露こぼるるばかりぬれかかりたるもいとをかし。垣のもとなるすすきなどの上にかけたる蜘蛛の巢のこぼれのこりて、ところどころに絲も絶えざまに雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそいみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつるが、露のおつるに枝の打動きて、人も手ふれぬに、ふとかみさまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる、人のこころにはつゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。(清少納言)

一〇 我が國の繪畫

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、その區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。嘗に絹紙と彩具との相違のみならむや。その用意筆法等に於て皆然り。かれにあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近・明暗力めて自然に背かざらむ事を期し、これにあつては文化の精神的方面獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。かれは色彩を旨とし、これは描線を重んじ、かれは實相の通りに空氣の色をも漏す事なく、

これは主體の外は生地の儘を存す。一は濃豔、一は瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。これらの差別は蓋しその初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりて、これを合一せむとする傾向あるなり。

わが國の文藝における佛教の感化の甚深なることは多言を要せず。眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興隆に始まり、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されどこの時代も彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれど、繪畫の歩調は未だこれに伴はず。平安朝に巨勢金岡が出て

(三三三—三三六)

一五〇年代前半の人。

し頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も槩して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は他に類例を見ず。佛敎も亦形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺・法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂講堂、七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし状態は、歴史の傳ふところ、今に存する鳳凰堂を見てもその一端を覗ふべし。香煙徐に薫じて幢幡を掠め、蓮華頻に散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に沍え、頓伽の袖は庭前に翻つて舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の

來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、その色は珊瑚・水晶を碎き、その線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮かに、精を窮め、微を闡きて、後世の乾枯・洒脫なるものとは全く撰を異にしたること、想見するに足る。

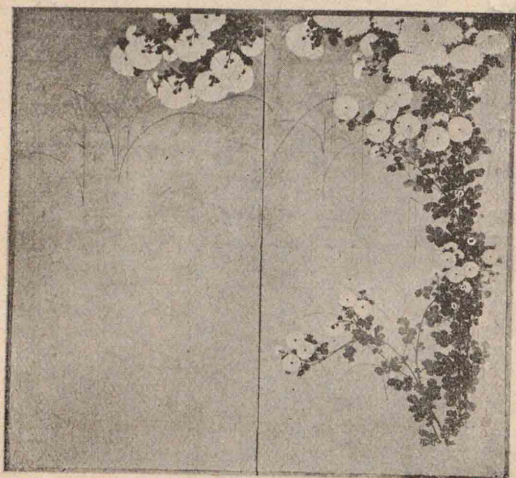
鎌倉時代の繪卷物も、また日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬪争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛敎勃興の機運に従ふ。いづれも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれども、内容・外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟等その代表者たり。

この革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳來せしより、漸く養ひ來れる勢力の、ここに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑、平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくぐるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も眼を遮らず、一旦その道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらむ。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず、例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば

兒戲、熟視すれば神工、益味うて益趣あり。恍惚として吾、我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、風流餘韻延いて近代

に及べり。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫も稍移りて雄大、穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は更にその規模を縮めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野、住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ、元祿の盛時には、裝飾に傾ける



尾形琳筆

(一) 尾形氏、光琳派の祖。(一三三六)
(二) 英氏。(一三三二—一三三六)
(三) 菱川派の祖。(一三三五年頃歿)
(四) 池氏。(一三八三—一四一六)

光琳、滑稽の才ある一蝶あり。菱川師宣以來の浮世繪が時勢粧を寫して、山水・花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のも



池大雅筆

のに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疏にし、氣韻生動を以て第一義とするところは即ち相似たり。應舉等の寫生畫は自然の模寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また

(五) 圓山氏、圓山派の祖。(一三九三—一四五)

(六) 田中氏。(一四八三—一五七)
(七) 菊池氏。(一四四六—一五五)

清淡・洒脫の習を脱するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歴史畫の如きは、即ち學界における國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但これはかれの如き價値なきを憾とするのみ。一派また一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だその間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるものなく、かかるうちに明治の昭代は來れり。(藤岡東圃)

一一 西洋の文藝復興と現代の日本

世界の過去には、我が邦の今日に勝る時代ありしかといふに、支那・印度・波斯・埃及の古代文明、希臘・羅馬以來三千年の歐羅巴の文明にも、今日に比すべきは、今を隔つる四五百年

前の名高き西洋の文藝復興時代唯一つあるのみ。こは歐羅巴太古の文明が希臘に起源して羅馬に移り、その帝政時代に盛り極まりて衰頽し、竟に今日の日耳曼諸族に滅ぼさるるに至つて、歐羅巴全土が戰國となり、學藝は廢れ、制度は紊れ、武力これ正義の暗黒時代となりしこと凡そ七百年、氣運漸く熟し、秩序茲に生じ、長夜の闇を破りたる大日輪の如くに、新しき文明の成り出でたる時代なり。

譬を以ていはば、この時代は、わが元祿享保の武家文明に王朝文明の粹を合せ、更に明治維新の活動を加へ、これを歐羅巴大になしたりといふべき目覺しき時代なり。帝王・侯伯・法皇・僧官等の暴横もこの時より漸く減じ、今までは社會は

(一) Columbus.
(1435—1506)
(二) Diaz.
(1455—1500)
(三) Vasco da Gama.
(1469—1525)

(四) Magellan.
(1470—1521)

貴賤の二階級に峻別せられたりしに、上流社會と下等社會との間に、商人・工人の中等社會興り、平民參政の端緒も開け、學藝の研鑽剩す隈もなく、今の所謂科學もこの際始めて産聲を揚げ、哲學も蘇生し、美術・文學も榮え、新に發明せられたる活版術は忽ちの間に發達して、新思想・新現象を八面に傳播し、羅針盤の發明は航海を容易にし、^{コロンブス}は米の大陸を發見し、^{ダイアズ}は亞弗利加を廻り、^{マゼラン}は印度に直航し、^{マゼラン}は世界を一周せり。時の歐羅巴人は既に學藝の復興によつて智情の新天地を得て、精神界の自由を享樂したりしに、今や亞米利加大陸を得、南洋の諸島を得、亞細亞・亞弗利加との交通をも自由にすることを得て、物質

(←) Copernicus
(1473—1543)

(→) Luther
(1483—1546)

的にも一の新天地を見出したるなり。

この時に當つて、學者には^(二)ユヘルニカスといふ巨人出て、新に地動説を唱へ、地球を宇宙の中心とする舊説を破りて、人心の謬蒙を啓きしかば、暴横なる羅馬法皇の威信漸くゆらぎ、偉人^(三)ルーテル出でて宗教の改革を唱ふるや、天下の大勢は靡然としてこれに向ひ、王侯僧侶の壓制に苦しみて、天道の是非を疑ひ、意氣銷沈し、厭世悲觀に流れたりし國民も、ここに意志の自由を得て、自立の志を起し、進取の勇を發し、現世界に活動して、性の最善を盡さむと力むるに至りたり。希臘亡びて以來、かばかり現世を樂觀し、自力を恃みて活動せし時代は無し。今の所謂箇人主義・平民主義はこの間に

端を發せしなり。

しかしながら斯かる目覺しき西洋の文藝復興も、わが國の現代より見れば、必ずしも羨むには及ばず。何となれば今日の日本は、かの時代に歐羅巴諸國が獲たるあらゆる文明の要素を、第十七八世紀の烹熟を經、佛蘭西革命の大刷新を經、鐵と蒸氣と進化論との普及したる第十九世紀の新發展を經て、殆ど悉く攝取するを得たればなり。若し西洋の文藝復興を歐羅巴大といふべくば、これは世界大の文明といひつべし。黒船始めて下田に入りて、北米合衆國の使命を齎ししより凡そ五十年、我が邦はその間に、歐羅巴が文藝復興以來に醸し成したるあらゆる文明を吸收せり。これより先、東

(三) 嘉永
二五、三、
六年

洋にては、周以來隋・唐・元・明に及ぶ支那の文明と印度の文明とを吸収し、王朝文明と武家文明とを経て、渾然たる一大特色ある日本文明を造り得たりし所に、猛然として歐米の文明が侵入し來りたるなれば、恰もこれ東西兩大洋の海嘯が日本海口に衝突し、天を拍つて碎け下り、陸地に迸つて港市・漁村を一掃し、山の頂と海の面とを一つらにし、無數の倒木・家屋・人畜を濁波に漂はせ、今なほ東西に滄盪して定まる所を知らざるが如し。眞に空前の壯觀なり。

龍若し雲を得て始めて飛揚すべくば、獅子若し曠野に出でて始めて奮迅の勢を逞しうするを得べくば、現今こそは英俊の士の爲すあるべき時代たるは勿論、庸劣の人もまた

時勢に驅られて、何等かの天分を遂げうべき時機なりといふべけれ。今日だに生れ甲斐ある人となり得ざる者は、他の時に生れては何事かを能くせむ。古今東西の文明の精粹は今や盡くわが眼前に湊まり、これを利用する自由は各人の心の儘なり。志を立てて事に従はむとするに當つて、便宜の多きこと、過去には今日に比すべきなし。さもあれ我に便宜の多きと同じく、あらゆる人にも便宜多く、随つて競争の激烈なることも舊時代の比にあらねば、懦弱・庸劣なる者の忽におひ落され抛げだされて、悲運に陥るを免れざること、も事實なれど、それは已むを得ざる所なり。かかる便宜ある時代に生れあひながら、その一身をだに立てえざるは、槩ねその

人自身の罪なり、世を怨み人を怨みむは誤れり。(坪内雄藏)

一一 出 廬

*河南省南陽府より湖北省襄陽府に至る一帯の地をいふ。

嗚呼、南陽の舊草廬、

二十餘年のいにしへの

夢はたいかに安かりし、

光を韜み、香をかくし、

隴畝に民と交れば、

王佐の才に富める身も

ただ一曲の梁父吟、

閑雲野鶴、空闊く、

風に嘯く身はひとり、

月を湖上に碎きては、

ゆくへなみまの舟一葉、

ゆふべ、暮鐘に誘はれて、

訪ふは山寺の松の風、

江山さむる曙の

雪に驢を驅る道の上、

寒梅瘦せて春早み、

幽林陰を穿つとき、

伴は野鳥の暮の歌、

紫雲たなびく洞の中、

誰そや、碁局を友の身は、

その隆中の別天地、

空のあなたを眺むれば、

大盗きほひはびこりて、

荒びて、榮華さながらに、

風の枯葉を掃ふごと、

治亂興亡おもほえば、

世は一局の碁なりけり、

その世を治め、世を救ふ

經綸曾に溢るれど、

名利を俗に求めねば、

岡も臥龍の名を負ひつ、

亂れし世にも花は咲き、

花また散りて、春秋の

うつりはここに二十七、

高眠遂に長からず、

信義四海に溢れたる

君が三たびの音づれを

背きはてめや、知己の恩。

羽扇綸巾、風輕き

姿は替へて立ちいづる

草廬、あしたの主や誰。

古琴の友よ、さらばいざ。

曉さむる西窗の

殘月の影よ、さらばいざ。

白鶴歸れ、嶺の松。

蒼猿眠れ、谷の橋。

岡も替へよや、臥龍の名。

草廬、あしたは主もなし。

成算胷に藏まりて、

乾坤ここに一局碁。

ただ掌上を指すがごと、

三分の計はや成れば、

見よ、九天の雲は垂れ、

四海の水は皆立つて、

蛟龍飛びぬ、淵の外。(土井晚翠「天地有情」)

一三 赤壁の鏖戦

孔明(一)親ら吳(二)に使用して孫權(三)に説き、攻守同盟の約を結びて、

先づ曹操(四)を撃たむことを策し、劉備(五)・周瑜(六)の連盟軍は兵を夏

口に督(七)して曹操を邀へ、曹操の大軍は上流より下りて之と

戦はむとす。正(八)に是、建安十三年冬十二月、一夜、天清くして寒

月高く、銀波滔滔たる大江に動くとき、曹操槩を横へて舷頭

に立ち、雙眸(九)に落つる江南の山河を展望し、中原既に幾多の

英雄を驅り盡して、大旆の指す所、今や悉く乃公の掌裏に入

らむとするを想見し、胷中無量の感慨に堪へず、乃ち高歌し

(一) 諸葛亮(一八〇—二〇七)
(二) 吳主(二〇二—二〇九)
(三) 孫權(一八二—二〇三)
(四) 魏主(二〇二—二〇九)
(五) 劉備(一六一—二〇七)
(六) 吳の將。
(七) 今の漢口。
(八) 八六八。
(九) 八六八。

短歌行。

酒の異名。

て曰く、

對酒當歌、人生幾何。譬如朝露、去日苦多。慨當以慷、憂思難忘。
 何以解憂、惟有杜康。青青子衿、悠悠我心。呦呦鹿鳴、食野之苹。
 我有嘉賓、鼓瑟吹笙。明明如月、何時可掇。憂從中來、不可斷絕。
 越陌度阡、枉用相存。契闊談讌、心念舊恩。月明星稀、烏鵲南飛。
 遶樹三匝、何枝可依。山不厭高、海不厭深。周公吐哺、天下歸心。
 歌に多少の悲調あり、多少の悲觀ありと雖も、其の悲調は寧ろ偉大なる成功者の悲調なり、其の悲觀は寧ろ氣昂り、志満ちたるものの悲觀なり。しかも一轉、自ら周公を以て居るの氣槩を示し、以て一篇を結束したる處、何等の雄渾、何等の壯大。顧ふに壯歲以來、戰袍に留めし馬蹄の塵を拂ふに暇なく、

兵陣の間に馳驅したる十幾年の星霜も、今ははや兒曹に誇示すべき一場の語草たらむとす。天下は此の一戰に因つて以て悉く乃公に歸すべしとの滿腔の悦は、さすがに矯飾に長けたる此の奸雄も、蔽はむと欲して遂に蔽ふこと能はざりしならむ。然れども事、志と違ひ、赤壁の會戰は曹操の爲に遂に一大悲曲となりぬるを如何にせむ。

山河依然たり、一痕の寒月、今なほ戰跡を照す。後九百餘年を隔てて、稀世の文豪蘇東坡は一管の筆を攜へて此の地に遊び、孟徳が當年の氣槩を横槩の歌に想ひ起し、天地の悠久なる、明月清風の獨り詩人の來つて領するに任ずるを悲しみ、英雄興亡の跡を偲びしもの、文彩奕奕、千古誦すべく、孔明

宋の人。(二六六) (一七六)

周瑜。

の大略、孫權の英斷、劉備の雄才、周郎の豪邁、曹操の驕盈と相映發、湊會して、誠に此の詩的大戰を不朽にするものあり。但し赤壁の戰は武昌の上游に行はれ、赤壁の遊は其の下流なりしが如くなれども、此の戰と此の詩とを渾融する我等の美感は、かかる小事實の穿鑿を寧ろ無用とせむとするなり。さても兩軍は一たび戰を交へしが、操の軍利あらず、少しく退きて江北に次し、周瑜等の兵船は進みて南岸より遙かに之と相對せり。瑜の部將黃蓋、獻策して曰く、「今、敵は衆にして我は寡く、與に持久せば我必ず危し。操の軍を見るに、船艦を連ねて首尾相接す。燒いて走らすべきなり」と。瑜之を然りとし、蓋は先づ密かに書を操に送りて降を請ひ、大船數十隻

を擇びて之に薪草を載せ、膏油を灌ぎ、紅幔を張りて之を裹み、上に牙旗を樹てて、「曹公に報ず」と大書し、東風に帆を張りて、さながら一隊の兵船が逸し出でて魏の軍に合せむとするものの如く装ひ、別に走舸を備へて各、大船に繋ぎ、之に兵士を乗せて俱に進ましめたり。曹操の軍吏、皆頸を延きて觀望し、黃蓋來り降ると喜び、何等の備もなさざりしに、漸く近づくに及びて、諸船同時に火を發し、折しも烈しき東風に追はれて、箭の如くに北船の間に亂入し、猛火燄燄としてこれを焚盡し、延いて岸上の宿營に及び、人馬或は燒かれ、或は溺れて死するもの算なく、而して南軍の輕銳、鼓噪して其の後に繼ぐに至つて、北軍全く壞亂し、操は纔かに敗兵を收め、倉

皇として北に走りぬ。あはれ、昨日までは八十萬の大軍、舳艫千里、旌旗空を蔽うて長江江上を壓したる壯觀も、今や化して一場の夢と消了んぬ。東風の周郎に恵みしもの亦大なるかな。然りと雖も世に若し赤壁の大勝を以て只管東風の恵に歸し、南軍將卒の意氣を想はざるものあらば、そは猶我が元寇の役を以て神風の賜として、護國勇士の忠誠を忘れむとするが如きなり。(白河鯉洋 諸葛孔明)

一四 菅公の左遷

醍醐の帝の御時、(一五三)時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くしておはしき。(一五五)菅原のおとどは右大臣の位にておはします。

(一五三)藤原時平。(一五五)菅原道真。(一五五)菅原道真。

そのをり、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしけむ、共に世の政をうちせしめ給ひし程に、右大臣はさえも世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御歳も若く、さえもことの外に劣り給へるによりて、右大臣御おほえことの外におはしましたるに、左大臣安からずおほしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十九日、太宰權帥になし奉りて、流され給ふ。この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男

(一五六)一五六一。

君たちは皆程程につけて位どもおはせしを、それも皆方方に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなむ」と、公も許さしめたまひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎あやどくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さざりけり。方方にいと悲しく思し召して、御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ、梅の花、

あるじなしとて春なわすれそ。

又亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ、

宇多天皇。

山城國乙訓郡山崎。

君しがらみとなりてとどめよ。

なき事によりかく罪せられ給ふをからく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるままにあはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢を、ゆくゆくも、

隠るるまでにかへりみしはや。

また播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さる

る夕べ、遠方に處處煙立つを御覽じて、

夕されば、野にも山にもたつけぶり、

なげきよりこそもえまさりけれ。

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

かげ見るときぞなほ頼まるる。

さりともと、世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならず、ただよふ水の底までも、

きよきところは月ぞてらさむ。

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給はめとこそはあめれ。

*
太宰府。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。

「これは文集の白居易が、『遺愛寺鐘欵枕聽、香爐峯雪撥簾看。』といふ詩にもまささまに作らしめたまへり。』とこそ、昔の博士どもは申しけれ。

またかの筑紫にて九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしに、この大臣作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感

じ給ひて、御衣たまはり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとどその折思しめしいてて作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしこく、人人感じ申されき。このことども、只ちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書きあつめ、一卷とせしめたまひて、後集と名づけられたり。また折折の歌を書きおかせ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。

菅家後集。

また雨の降る日うちながめたまひて

あめの下かわける程のなればや、

著てしぬれぎぬひるよしもなき。

やがてかしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそらの松をおほさしめたまうて、渡り住みたまふこそは、唯今の北野宮と申して、あら人神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめたまふ。いとかしこくあがめ奉りたまふめり。筑紫のおはしましどころは安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひていとやむごとなし。(天鏡)

官幣中社北野神社。京都の西北隅にあり。

一五 浪の花

あやふくこと、奇なきよある。そは奇附その奇と云ふ事
 こころもくぬふてれあゝ一葉のひさくを
 松のあゝとやとぞい附なをいふはさうそのひあては、
 うゝく海あけて、附浪の花さるるある人のあゝ
 浪のあゝとぞい附なをいふはさうそのひあては、
 やまひぬけるうけふ附（校異土佐日記）

一六 小野の御室

昔(一)惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに
 水無瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛りには、その
 宮になむおはしましける。その時(二)右馬頭なりける人を常に

(一) 文德天皇の皇子。
(二) 四六―一五二

(三) 在原業平。(四六五
―一五四)

ゐておはしましけり。狩は懇にもせて、大和歌にかかれりけ
 り。今狩する交野の渚の院の櫻ことにおもしろし。その木の
 下におり居て、枝を折りて挿頭にさして、上・中・下みな歌よみ
 けり。馬頭なりける人、

世の中に、たえて櫻の咲かざらは、

春のころは長閑けからまし。

となむ讀みたりける。又或人の歌、

散ればこそ、いとど櫻はめでたけれ、

憂き世になにか久しかるべき。

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。

歸りて宮に入らせたまひぬ。夜更くるまで物語して、さて

あるじの皇子入りて大殿ごもりたまひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭よめる。

業平の
まじりて
をのりて
をのりて



在 原 樂 平

あかなくに、

まだきも月の

かくるるか、

山の端にげて

入れずもあらなむ。

かくしつつかうでつかうまつりけるを、皇子おもひの外

に御髪おろさせ給ひて、小野といふ處に住みたまひけり。正月に拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれにいともの悲しくておはしましければ、やや久しく侍ひて、古の事など思ひいできこえけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、え侍はで、夕暮に歸るとして、

忘れては夢かとぞおもふ、思ひきや、

雪ふみわけて君を見むとは。

とてなむ泣くなく來にける。(伊勢物語に據る)

一七 受 發

大丈夫苟も身を學藝に委ねむと欲せば、まづ受發の二途において大丈夫の覺悟あるを要す。受とは内の外に受くるなり、發とは外に内の發するなり。受くることは須く大海の百川を吞むが如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらむことをこれ嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず。發することの豊かならざらむことをこれ恐れて、方の東方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふ所あり、發するに問ふ所あるは兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

ず。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして、實は一。受を能くすれば、發はその中に在り。大賢は能く受く。中才は勉めて克く受く。賤人は好んで受くるあり、敢て受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらむを期する、これを眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦する者は、學藝を成すに庶幾からむ。受の途に於て大丈夫の覺悟なき者は、爲すにだに堪へざらむとす、何ぞ成ることあらむ。

士の身を學藝に委ぬる者、誰か生を終ふる迄人の批評を被らざる者あらむや。我、思ふ所あり、言ふ所あり。人も亦思ふ所あり、言ふ所あり。我、我が口を箝して人の言に就くことを

難しとせば、人をして其の舌を結んで、我が意に従はしめむとするも亦甚だ難からずや。批評の我に加へらるるや、堯舜の聖と雖も、亦これを如何ともする無し。況や身死し、肉爛れても、日に新に、日に新に、批評の鞭笞を我が枯骨に加ふる士の蜂起、簇生せむも、亦未だ知るべからざるをや。

評の性は多く褒貶毀譽を具す。人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。ここに於て毀譽褒貶の我が頭上に加へらるるや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒に懼れ、或は徒に驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし、堂堂たる六尺の身、他人の簸弄する所となり了りたるを悟らず。人を颺風にし、我を糝糠にす。實に自ら待つ薄きのみ

ならず、抑、又學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈に斯くの如くなるべけむや。それ大海の百川を吞む、大も亦吞み、小も亦吞み、清も亦辭せず、濁も亦辭せず、日に黙黙たり、洋洋たり。而して漸く我が大を成し、徐に我が大を用ひ、日に活潑潑たり、圓陀陀たる大作用をなす。大賢の人の言を受くる亦かくの如し。精雜疏密の説、毀譽褒貶の評、皆一齊にこれを受けて擇ばず。唯片言隻語も、我が知非の鑑、修治の因たるべきもの、我をして日に進ましむるあらむことを願はざる無し。古人まことにかくの如し。堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。

この故に、學藝に志ある者は、能く外に受くる大賢の如く

なる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分
 疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縱令
 満面の詬辱、堪へむとして堪ふる能はず、筋張り、血涌き、劔を
 抜いて直に報いむと欲するに至るとも、先づ牙關を咬定し
 て隱忍し、頭を垂れ、心を虚とする工夫の裏より、一天地を拓
 き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲馬勃をも我が藥籠中に收
 むるが如くならむを期すべし。これを大丈夫の受の覺悟と
 いふ。人貶すれば、便ち受けずして胡言亂説し、人讚ずれば、便
 ち默受して欣欣たる如きは、閨閣の兒女に在つては咎むべ
 くもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。學藝に
 遊ぶものは當に反求の功に頼るべし、漸く深造するあらむ。

ただ反求の功に頼る、則ち揚げらるるも自滿せず、抑へられ
 なば愈、奮ふに足らむ。

大丈夫まさに、受發の二途において、大丈夫の覺悟を以て
 立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、能くその心に勝
 つ、人に勝つに於て何かあらむ。能くその心に勝たず、人に勝
 つを如何せむと。爲す所ありて美とせられず、内に求めずし
 て人に責むる、その情は憫むべし、その爲は悲しむべし。我、豈
 に人の勝つを好むを陋とするのみならむや、我また實にこ
 れを愧づ。傲はむかな海や、百川それ海を如何せむ。

(幸田露伴一調言)

*孔子の孫なり、
 中庸を作る。

一八 幻住庵の記

石山の奥、巖間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲、二百歩にして、八幡宮たたせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなる事を、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとど神さび、物しづかなる傍に、住捨てし草の庵あり。蓬根、笹、軒をかこみ、屋根洩り、壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻

(三) 膳所藩士本多八左衛門、探山居士。
(二) 芭蕉の門人。

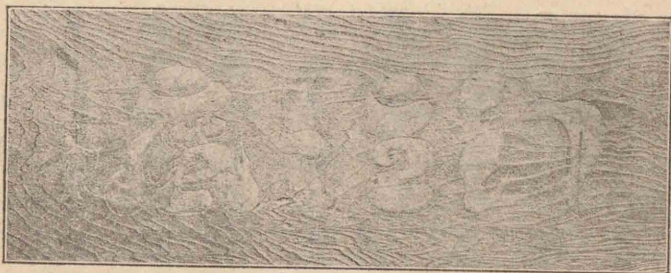
(三) 四十六年。(八) 祿二年。

(四) よしの山やがて出てじと思ふ身を、花散りなばとひとやまつらむ。(僧西行)
(五) 昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南坼。乾坤日夜浮。(杜子美)
惠宗烟雨歸雁。坐我瀟湘洞庭。欲喚扁舟歸去。故人道是丹青。(山谷集)

住老人の名をのみ残せり。予亦市中をさる事十年ばかりにして、五十年やや近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみぐるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歲湖水の波にただよひ、鳩の浮巢の流れとどまるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端ふきあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の、やがて出てじとさへ思ひそみぬ。さすが春の名残も遠からず、つつじ咲残り、山藤松にかかつて、時鳥しばしば過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、木つつきのつつくとも厭はじなど、そぞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人

田上山麓に猿丸太夫の墓ありと無名抄に見ゆ。

除老 海棠 巢上 王翁 主簿 峯庵 (山谷集)



幻住庵の額

家よきほどに隔たり、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。比叡の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たるる舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に、水雞のたたく音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は、土峯の梯に通ひて、武藏野のふるきすみかも思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。なほ眺望隈なからむと、後の峯に這上り、松の棚つくり、藁の圓座を敷いて、猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、主

とくとくと落つる岩間の苔清水、汲みほすほどもなきすまひかな。(僧西行の歌なりといふ。)

藤木甲斐守敦直、寛永時代の能書なり。

簿峯に庵を結べる王翁、除佗が徒にはあらず。ただ睡癖山民となりて、孱顔に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくとくの雫を侘びて、一爐の備いとかるし。はた昔住みけむ人のこと、に心高く住みなし侍りて、たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき處など、いささかしつらひたり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが子にて、このたび洛に上りいまそがりけるを、或人して額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝といひ、させる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の

上の柱に懸けたり。晝はまれまれとぶらふ人人に心を動か
 し、或は宮守の翁、里のをのこ
 ども入りきたりて、ゐのしし
 の稻くひあらし、兔の豆畑に
 通ふなど、我が聞知らぬ農談
 に、日すでに山の端にかかれ
 ば、夜座静かに月を待ちては
 影を伴ひ、燈を取つては、罔兩
 に是非をこらす。

松 尾 芭 蕉
 閑寂を好み、山野に跡をか

白居易
 杜甫

先めけりし
 推の本し
 え福之仲秋日
 芝草志自書

筆 蹟
 くさむとにはあらず。やや病
 身人に倦んで、世を厭ひし人
 に似たり。つらつら年月の移
 りこし、拙き身の科を思ふに、
 ある時は仕官懸命の地を羨
 み、一たびは佛籬祖室の扉に
 入らむとせしも、たよりなき

風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさ
 へなれば、終に無能無才にして、この一筋につながる。樂天は
 五臓の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしから
 ざるも、いつれか幻の栖處ならずやとおもひ捨ててふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり、夏木立。(松尾芭蕉)

一九 風雅の道筋

此處よりも愚墨を進じ候處其の許よりも音問に預り、忝く對顔の心地にて拜見仕候。愈、御堅固被成御座候旨、千萬芽出度存候。竹助殿御沙汰いづれもの御狀にも不被仰下候。御成人、わるさ日日につのり可申と存候。歳旦三つ物の事、先書に具さに申上候。愚句年年口にまかせ心に浮ぶばかりに申捨て候へども、最早これを歳旦の名残にもやと存候。御耳にとまり候へば、かひある心地せられ悦に不堪候。

曲翠の男

發句、脇句、第三の三句を連ぬる俳諧の附合。

併諧の點者に採點を乞ひて、點數によりて勝負を決すること。

一、幻住庵上葺被仰付候由、珍重に存候。うき世の沙汰少少遠きは此の山の事と、折折の寢覺め難忘候。露命消え残り候はば、再び薄雪の曙をと存候。

一、風雅の道筋、大方、世上、三等に相見え候。點取に晝夜を盡し、勝負を争ひ、道を見ずして走り廻るものあり。彼等は風雅のうろたえ者に似申候へども、點者の妻子をはごくみ、店主の金箱を賑はし候へば、僻事せむには優るべし。又その身富貴にして、目に立つ慰みは世上を憚り、人事言はむよりはと、日夜に二卷三卷點取り、勝ちたるも誇らず、負けたるも強ひて怒らず、いざ又一卷など取りかかり、線香五分の間に工夫を廻らし、終に即點

などと興ずる事ども、偏に少年の讀歌留多に等し。されども料理を調へ、酒を飽く迄にして、貧なる者を助け、點者を肥えしむる事、是また道の建立の一筋なるべきか。また志深く、情を慰め、あながちに他の是非をとらず、これより誠の道にも入りぬべき器なりなど、遙かに定家の骨を探り、西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族、都鄙を數へて十指を伏されず、君も即ち此の十の指たるべし。よくよく御慎み、御修行專一に存候。

一路通事は大阪にて還俗致したるとの事、推量致候。其の志、三年前より見えたる事に候へば、驚くに當らず

芭蕉門人。少時、路傍に歌を書きて錢を乞ふ。芭蕉その才を愛し、弟子として出家せしむ。

橋永愷、出家して能因といふ。平安朝中葉の歌人。

候。とても西行能因の眞似はなるまじく候へば、平生の人にて御座候。常の人が常の事を爲すに、何の不審か可有御座哉。拙者に於ては不通仕るまじく候。俗になり候うてなりとも、風雅の助になり候はむは、昔の乞食より優り可申候。

二月十八日

はせを

曲翠様

二〇 近世の和歌

下河邊長流

下野や那須野にしげる篠をとりて、

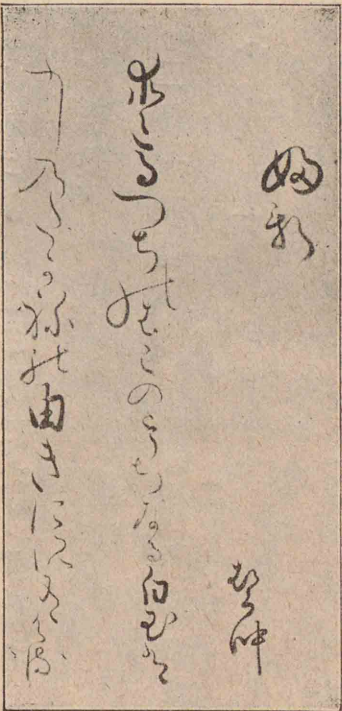
(1114-1118)

(11) (三三〇—三三一)

あづまをのこは矢にぞはくなる。

僧 契 沖

初瀬のや里のうなるに宿とへば、



僧 契 沖 筆 蹟

霞める梅の立枝をぞさす。

荷 田 春 滿

(12) (三三八—三三九)

ますらをや折にふれては、たけり猪の

たけき心のなどなかるらむ。

賀 茂 眞 淵

(13) (三三九—三四〇)

(四) 常陸國眞壁郡葦
穂山今、足尾山
とさふ。

小筑波も遠つあしほも霞むなり、

ね越し山こし春や立つらむ。

信濃なる菅の荒野をとぶ鷺の

翼もたわに吹く嵐かな。

荷 田 蒼 生子

(五) 春満の女。(三六一
—三四六)

穂浪よる秋の田の面にかりほして、

風の姿は見るべかりけり。

本 居 宣 長

(六) (三四〇—三四一)

思ほさぬ隠岐のいでましきくときは、

(三六三—三四六)

賤の男われもかみさかだつを。

小澤 蘆庵

大堰川、月と花との朧夜に、

ひとりかすまぬ浪の音かな。

加藤 千蔭

(三三四—三四六)

みづえさす葉びろくまがし露ちりて

月おもしろき夜半にもあるかな。

村田 春海

(三四七—三四八)

心あてに見し白雲はふもとにて、

思はぬ空に晴るる富士のね。

加藤 美樹

(三四九—三五〇)
眞淵門人。(三六一—三四九)

もののふの草むす屍年ふりて、

あき風さむし、桔梗が原。

香川 景樹

(三五二—三五三)
信濃國東筑摩郡に在る古戰場。

いたづらに思ひし峯の一つ松、

こよひ月こそすみのほりけれ。



香川景樹筆蹟

富士のねを木の間木の間にかへりみて、

松の影ふむ、浮島が原。

加納 諸平

(三五七—三五八)
宣長孫弟。(三四六—三五七)

雲かかるわたのみ中に、あら潮を

雨とふらせて鯨うかべり。

熊谷直好

(二) 景樹門人。(三四四一—三四五三)

うちしきる麓の里の雞が音に

あけこそわたれ、三保の松原。

足代弘訓

(三) 宣長孫弟。(三四四五—三四五七)

夕ぐれにふる薄雪のこちして、

おぼる月夜にちる櫻かな。

橘曙覽

(四) (三四三一—三四三八)

鬣をとらへまたがり、裸馬を、

あづまをのこはあらなつけする。

八田知紀

(五) 景樹門人。(三四五九—三四六一)

網引する舟の夜寒を身にしめて、

寐られぬ妻や衣うつらむ。

太田垣蓮月

(六) 景樹門人。(三四五三—三四五五)

冬畑の大根のくきに霜さえて、

朝戸出寒し、岡崎の里。

二二 草木を愛し自然を喜ぶ上

氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉、四季折折の風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が現生活に執著するのは自然である。四圍の風光の客觀的に我等の前に横はるものは、總て笑つて居る中に、住民が獨り笑はずには居られぬ。さればまた現世を愛し、人生生活

を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。この點に於ては東洋諸國の民は、北歐羅巴人種等に比べれば、天の福徳を得て居ると言つてよろしい。殊に我が日本人が花鳥風月に親しむことは、吾人の生活いづれの方面に於ても見られる。

上代に於ての衣食住は、多く我が國土に繁茂して居る植物界から材料を取つた。千木高知といふ千木も、太敷立といふ宮柱も皆木材であつた事は言ふまでもなく、藤葛を以てこれをくくりつけたのが、綱根ゆるぐ事なくといふ綱根である。楮衣のシロタへ、麻衣のアラタへ、草木の汁でこれを染めたのが摺衣であつた。正木日蔭等の蔓草を取つてかつらとし、手纏ともした。外國人の様に、又蠻人の様に、鳥の羽獸の皮を著飾つたことは一つも見えて居らぬ。少彦名神が、以鷓鴣羽爲衣。とあるのは單一の異例で、黒川眞頼翁は、これは外國から來られた神だからだ。といつて居られる。鷓鴣草、葺不合尊の御名によつて、鷓の羽で屋根を葺いたといふことは分るが、家の屋根としては鷓の羽葺

の屋根などは、誠に優美なものであらう。鹿の角を廊下中に並べて置く。歐羅巴人の趣味とは違ふところがある。梓、櫨、檀を以て弓を作り、柳籐を以て矢を矧いだ。柳は矢の木である。葉盤、葉椀は木の葉を編んだものらしく、今の茅卷、柏餅にその名殘を残して居る。萬葉集の

家にあれば筥に盛る飯を、草枕

たびにしあれば椎の葉に盛る。

といふ歌で、上代の風俗も分る。到る處植物の繁茂した國土は、國民に向つて衣食住の材料をすべてそれから取らしめたのである。

日本の少女の著物の模様のはでやかなのは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、尙更にこれよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染まつて來る。昔のしのぶの摺衣、今の振袖模様、裾模様、つまりは同じ事である。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染出した縮緬友禪、繻珍の帯から下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木、花模様で飾つてある。その色合の名稱でも、櫻色、桃色、山吹色、栗

吹く風を勿來の關と思ひしに、道もせに散る山櫻花。(源義家)

色葡萄色・黄櫨・木蘭地・朽葉など植物界から取つた名が多い。むかしの女装束は櫻重ね・梅重ね・山吹重ね等、重ねの色合は、つねに四季折折の花に因んであつた。裳には海浦とて大海の景色を畫き、腰には唐草が縫うてある。やさしい女流の装束は當然ともいはうが、武士の戦争に出でたつ甲冑装束にも、小櫻威卯の花威・澤瀉威・齒朶革威など、如何にも優美では無いか。總じて我が國の甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、如何にも美しい美麗なものである。西洋の甲冑の蝦色の儘の具足とは比較にならぬ。西洋のはどこ迄も洋服式で、我が國のはどこ迄も衣冠束帶の式であつた。胴にも唐草を畫いたり、裾金物にも蝶をつけたり、菊の花をつけたりした。直垂の菊綴、その袖の露といふ名稱、甲冑にも杏葉とか、草摺とか、菱縫の板とか、いづれもやさしい名稱である。馬の鞍にも青貝をおいて、花などが散してある。銜にも杏葉銜がある。軍記物語の武將の出立を讀んで見ると、どうしても極彩色の土佐繪を見る心地がする。それであるから、吹く風を勿來の關と

行きくれて木の^(三)下かげを宿とせば、花やこよひの主ならまし。(平忠度)

歌ひ、行きくれて木の下蔭を」と歌つても、よく似合ふのである。西洋の蝦甲冑では似合ふものには無い。旗さしものにも獅子の頭や鬼の首などを附けないで、蝶や笹龍膽や澤瀉を附ける。皇室の御紋も菊と桐で、徳川家は葵である。今日の家家の紋にも、桔梗・櫻・梅・鉢・澤瀉・葵・牡丹・鳶・梶の葉・藤・松等の類が最も多いのは當然の結果である。

我等の日常が如何に植物及び自然界に興味を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅・御萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見して一層その多い事が分る。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子には別して松の葉や菊の花や、總て花木の形につくるのである。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられるが、魚類の料理も亦植物界自然界とは離れぬ。さしみのつま・鮓のつまには笹の葉をつかふ。強飯を贈るには重箱に南天の葉をしく。料理の膳・椀は金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器・陶器一切の美術工藝品が、草木・花鳥の繪であることはもとよりいふまでもない。之は裝飾美術とし

て近世の歐羅巴の美術に尠なからぬ影響を與へたものである。茶の湯の棗などは當然としても、俗に匙を散蓮華といふなども優美である。室に通れば、牀の間には花鳥の極彩色か、又は墨繪の山水がある。牀の間の活花は何流か知らぬが、恰好よく手際よく活けてある。欄間の彫刻も唐草や竹や梅の模様である。

插花の術、箱庭作り、盆景の山水、みな我が國人獨得の伎倆であつて、獨得の發達をして居る。繪畫では生じた花木の色、禽鳥の飛動して居るさまなど、西洋の靜物になれた目には、珍しく感ずるに違ない。すべて花を活けるにも、これを畫くにも、その生きた儘に、自然の儘にするのが美しい點である。枝をむしり取つて花ばかり挿しこむのは西洋の花瓶であるが、自然の枝根その儘に、天地の配合よろしくあらはすのが、活花でも、盆栽でも、日本人の長所である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。

二二 草木を愛し自然を喜ぶ 下

我が國の文學に自然を吟詠したものの多い事はいふ迄もない。繪畫が花鳥を以てまさつて居る事や、彫刻も人物よりも花鳥の方が多く、音樂も人聲よりも自然の音色に近い事や、又宮殿の朱塗の建築も、松杉の茂つた背景によつて一層その美をなすが爲に、市中の神社があまり美觀をなさぬ事などを考へてみれば、我が國の古來の文學が自然美を歌ふことを殊に長所とし、生命として居つた所以はわかる。上古から近世に至るまで、歌の大半は花鳥、風月の詠であつた。

ゆきのうちにはるは來にけり、鶯の

こほれるなみだ今やとくらむ。

秋の夜の明くるも知らず鳴く蟲は、

わがごともはや悲しかるらむ。

などは、日本人が鶯やきりぎりすになつて歌を詠んだのである。散文

古今集、讀人知らず。
同、藤原敏行の歌。

源氏物語。

源氏物語。

の中にも、

山風（三）にたへぬ木木の木の葉も、峯の朽葉も、あわたたしうあらし
ひ散れるまぎれに、

といひ、

鹿（三）はただ籬の下に佇みつつ、山田の引板（三）にも驚かず、色こき木ど
もの中に交りて、うちなくも憂へ顔なり。瀧の聲はいとど物おもふ
人を驚かし顔に、耳かしましう轟きひびく。草村の蟲のみぞ、よりど
ころなげに鳴弱りて、枯れたる草の下より、龍膽のわれひとりのみ
心長うはひ出でて、露けくみゆるなど、皆例の事なれど、をりから處
からにや、いと堪へ難き程の物がなしさ。

といつたのなどは、鹿も瀧も草も蟲も一切の景物、皆われ等同様の性
情を有するものと見做したのである。修辭學では之を擬人法といふ
が、擬人法はつまり天地自然を人と同じに見たものである。人と天地
自然とが融合したのである。この天地と一體になつて融合するとい

(三) Convention.
因習。

ふことが、我が和歌の生命であり、和歌を基礎とした多くの文學の生
命であつた。人の感情を抒べるのにも、皆自然の景色を以て表すので
ある。涙の瀧といひ、袖の時雨といひ、露の袂といひ、花の心といひ、思の
煙といひ、頭の雪といひ、消えいるといひ、時雨るといふ。自然の景色
の語は、直に吾人の感情の語である。人事と自然とを比較して、人生よ
り直に自然をおもひ、自然よりも直に人生を思念するのである。これ
が和歌から導かれて、國文學全體を通じて、軍記、謠曲、淨瑠璃等一般の
ものの根柢をなして居る。秋風といへば寂しいことを連想し、春雨と
いへば暖い靜かな感じがある。歌の語は一つのコンヴェンションを
なして、一種の情景を連想させる力をもつて居る。俳句はこれを利用
して十七字の小詩形をなし得たのである。

春秋の争は、神話時代に已に春山霞男と秋山下冰男といふものに
よつてあらはれて居り、萬葉集になつては、額田女王は、紅葉をば折り
てぞしぬぶ」と、春に對して秋山のあはれをたたへられた。源氏物語の

六條院では、紫上・秋好中宮に春秋の好みがあらはれて居る。四季の風景を敍して、清少納言が「春はあけぼの」から書きはじめ、兼好法師は「折ふしのうつりかはるこそものごとにあはれなれ」などと書いたが、貝原益軒も四季を、室鳩巢も春秋の争を論じてゐる。四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことは無い。この四季の景色と人事とを結び付けて感ずることは、即ちあはれを知るのである。源義家や源頼政や平忠度が如何に日本武士として優にやさしく感ぜられるかは、このあはれを知つたといふことがあるからである。太田道灌に關する「みの一つだに無きぞかなしき」の話は、史實ではなくして傳説であらうが、歌を好んだ武士であるから、ああいふ傳説が附いたのである。頼朝も尊氏も秀吉も、暇のある時は風流の技を翫んだのである。狂言の萩大名は、大名の癖にこの風流を解せぬからをかしいのである。風流といふこと、詩的といふことの意味は、自然に向つての憧憬が、その大半を形作つて居るのである。日本人の武士道は、西洋の騎士道の如

く婦人を崇拜せぬかはりに、自然の美を愛し、物のあはれを解したのである。

英雄豪傑ばかりでない。日本人程、國民全體が詩人的なるは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日、日本で歌を作る人はどの位の數であらう。宮内省の毎年の詠進は何萬といふ數である。歌を作らぬでも俳句を作る。どんな片田舎にも俳句の宗匠は居る。神社奉納の額面は、到る處に小詩人の名を列ねて居る。短くて作り易い詩形であるから、上手でこそなけれ、何人も作つて、花見・遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人は誠に忙しいのである。刑場に出づる罪人でも、死に臨んでは一首を口吟むといふ様なのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は全國民を擧げて抒情詩人である、敍景詩人であるといつてもよろしい。

それ故我が國民は隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や插花に慰安

頌基中納言。

を求め。昔は罪なくして配處の月を見たいといふ人もあつたが、日本人が世の中を厭ふといへば、風流三昧に日を送る。西洋でいふ厭世は本當にこの世の中が厭になるのである。自殺するより外に方法がない。日本人の厭世は、人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかつて花鳥風月に近づけば、それで厭な思はなくなるのである。西行法師が世を遁れたといつても一修行脚して花月を楽しんで居る。鴨長明は頻に世の中をあぢきなく思つたが、方丈記の様子で見れば、庵室に入つて自然を楽しんで満足して居る。雙が岡の兼好法師は、まだ十分に世の中が厭とも見えぬから問題外である。その他深草の元政上人でも、近い頃の太田垣蓮月尼でも、世の中に立交るのは厭でも、自然といふ樂地は別にあつたのである。(芳賀矢一「國民性十論」)

(三六三—三六六)

二三 上古の文學

太古未だ文字なき時代に、口口に傳誦して、歴史上の大事件、又は趣味ある神話・傳説を奈良時代まで保存せしものは所謂語部の語り物にして、日本書紀及び古事記は漢字を以てこの語り物を記載したるものなり。されば我等はこの二書によりて我が太古の國民の思想・想像・感情を察する事を得べし。中にも日本書紀は、純粹なる漢文なれども、古事記は國語のままに記したる部分多く、且つ素盞鳴尊昇天の條、大國主尊の國讓の條、天孫降臨の條、神武東征の條などの如き、或は雄大・豪壯、或は謹嚴・莊重なる敘事あり、又、目無籠、稻羽の白兔等の趣味多き神話に富めり。これを文學上より見ても、亦我が國の至寶なり。

記紀中には許多の歌謠あり。これ我が國最古の抒情詩なり。これ等には固より未だ後世の和歌の如き修辭上の巧緻を見ずと雖も、その間既に我が和歌の特質の形成せる事を認むべし。これを形よりいへば、五七の句と七の句とより成れるものにして、五七五七七の短歌と、五七數句の下に七を列ぬる長歌とを最も普通とす。これを内容より見れば、率直に喜怒哀樂の念を抒べて、真情流露、殆ど彫琢を用ひざるところに、稀に後世相及ばざるものあるのみ、なほ槩して幼稚なる人類に普通なる咨嗟・咏歎の聲なり。しかもその好んで比喩を天然にとりたると、冠辭・序詞の類の漸く成らむとせるとは頗る注意に値すべく、且つは我が詩歌の祖として、祖

先の感情の赤裸裸なる記録として、最も興味の高きを覺ゆ。かく、上古の歌謠はおほかた箇人的抒情詩なれども、別に社會的抒情詩ともいふべき國民の情緒を抒べたる美しき詞あり。壽詞と祝詞とこれなり。

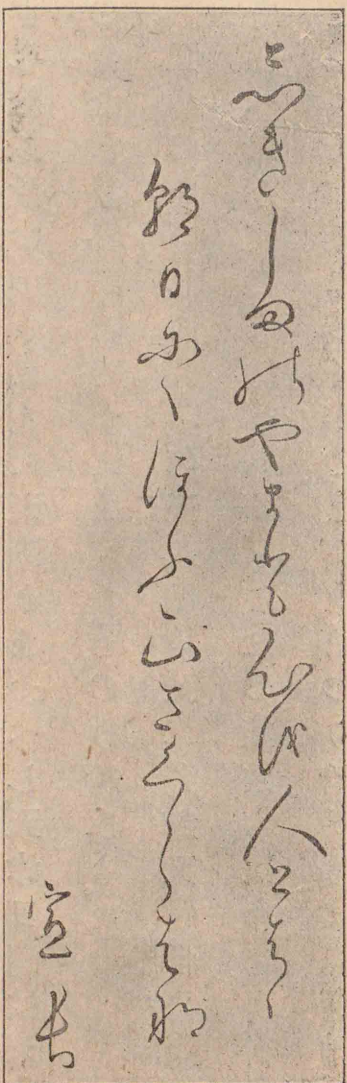
祝詞は神前に於て國家の安寧、國民の福祉を禱る詞、壽詞は或は御代の長久を壽ぎ、或は新室の賀儀を述ぶる等の場合に行はれたるものにして、その延喜式中に收めたるものの中には、遠く上古より傳はり來りしものもなきにあらず。その文、冠辭・序詞等を多く用ひたるのみならず、屢、同一の意味を少しく語を換へて重疊し、例へば「天翔り、國翔り」、「常磐に、堅磐に」、「見直し、聞置し」、「たひらけく、やすらけく」といひたる

など、散文といはむよりも、寧ろ詩歌に近き體裁を具へて、しかも莊重にして純朴、亦我が上古の文藝の一大産物なり。

敍上の歌文は總て未だ外來思想の感化を蒙らざりし我が國民固有の思想より成れるものにして、祖先崇拜の風俗、尊王愛國の精神、到るところに充ち満ちたるはいふもさらなり。更によくこれを玩味すれば、風光明媚なる山川に親しみ、平和なる家族的團欒を樂しみ、快活にして洒脫なる氣風を帯びたりし我等が祖先の面目は、自らその間に髣髴たるを覺ゆ。

二四 天孫降臨

ここに天照大御神、高木神の命もちて、日嗣の御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に詔りたまはく、今、葦原の中つ國こと



むけをへぬと申す。故、事よざし給へりしまにまに降りましてしるしめせとのり給ひき。ここに其の日嗣の御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の申し給はく、あれは降りなむよそほひせしほどに、御子生まれましつ。御名は天邇岐志國邇岐志天

津日高日子番能邇邇藝命。この御子を降すべし。と申し給ひ
き。

故^{かれ}ここをもて、申し給ふまにまに、日子番能邇邇藝命に命
おほせて、「此の豊葦原の瑞穂國は汝^{みま}知らさむ國なりと事よ
ざし給ふ。故、命のまにまに天降りますべし、天津日嗣は天地
のむた常磐堅磐にさかえまさむ」とのり給ひき。

又かの^こをきし八尺瓊勾玉・八咫鏡、又草薙劍、又常世^{とよよ}思金神^{おもひのかみ}
を副へ給ひてのり給へらくは、「これの鏡はもはらあが御魂
として、あが前を齋くがごと齋きまつり給へ。次に思金神は
御前の事を取持ちてまつりごちてよ」とのり給ひき。この二
柱の神はさくくしろ五十鈴の宮に齋きまつる。次に草薙劍

^(二)招き禱るといふ
意の古語。天の
岩戸の前にて招
禱せしをいふ。

^(三)今の熱田神宮な
り。

は尾張國の年魚^{としうま}市村^{いちむら}にまします神なり。

ここに天兒屋命・布刀玉命・天宇受賣命・伊斯許理度賣命・玉
祖命、併せて五伴之緒を配^{くま}り加へて天降りまさしめ給ふ。故
その天兒屋命は中臣連等が祖、布刀玉命は忌部首等が祖、天
宇受賣命は媛女君等が祖、伊斯許理度賣命は鏡作連等が祖、
玉祖命は玉祖連等が祖なり。

ここに日子番能邇邇藝命天降りまさむとする時に、天之
八衢にゐて、上は高天原、下は葦原中國まで照耀く神あり。故、
天照大御神、高木神の命もちて、天宇受賣神に、「汝^{みま}は手弱女な
れども、い向ふ神と面勝^{おもむか}つ神なり。故もはら汝往きて問はむ
は、「あが御子の天降りまさむとする道を、たれぞ、かくてをる。」

と問へ。とのり給ひき。故かく問はしめ給ふ時に、答へまつらく、あは國つ神、名は猿田毘古神。出でをるゆゑは、天つ神の御子天降りますと聞きつる故に、御前に仕へまつらむとして參迎へさふらふぞ」と申し給ひき。

故ここに天津日子番能邇邇藝命、天の石位を離れ、天の八重多那雲を押分けて、稜威の道別に道別きて天降ります時に、天忍日命天津久米命二人、天の岩鞆を取負ひ、頭椎の太刀を取佩き、天の波士弓を取持ち、天の眞鹿兒矢を手挟み、御前に立ちて仕へまつりき。故この天忍日命は大伴連等が祖、天津久米命は久米直等が祖なり。

故、天の浮橋に立たして、筑紫の日向の高千穂の久士布流

*不毛の地といふ古語なり。

多氣に降りいたりましき。ここにそじしのから國を笠沙の御崎にまぎ通りて、のりたまはく、「ここは朝日のたださす國、夕日の日照る國なり。故ここはいとよきところぞ。」とのり給ひて、底津石根に宮柱太知り、高天原に冰木高知りてましましき。(本居宣長「神代正語」に據る)

二二五 奈良朝時代の詞藻

我が文學の初めて著しき發達を現せる時代は、奈良の朝なり。國史の編纂もこの朝に成り、大かたの祝詞もこの時に撰ばれたるやうなり。

それが中にも、當代の主要なる詞藻を網羅せるものは萬葉

集なり。こは我が國の最も古き歌書にして、橘諸兄公の撰び置かれしを、大伴家持卿の補ひしものなりといへり。

上代の歌は、見るもの聞くものにつけて、思ふままを長くも短くも言ひいだせるが、おのづから詞の文を成したりしを、この朝の始よりは、ただにそれのみには止まらず、物によそへて人を祝ひ、人を悲しみ、或は想像を以てし、或は譬喩を以てせるなど、後世のいはゆる題詠のもとをなし、又その體も長歌・短歌・旋頭歌など、句の數もやや定まれり。これまた漢詩の長短各、その體を得たるに倣へるにや。

集中收むる所の歌人多き中に、柿本人麿と山部赤人とは、(一) 持統・文武兩朝に仕へたる人。
(二) 元正・聖武兩朝へ仕へたる人。 嶄然として衆に抽んで、當代の詞藻を代表せり。紀貫之曾て

この二人を評して歌の聖とし、高く神妙の思を振ひて、古今の間を獨歩すといへり。げにや人麿が詞は龍の風雲を獲たるがごとく、大海の潮の涌くがごとし。高市皇子の軍立の狀を陳ぶるとて、

大御身に太刀とりおばし、大御手に弓とりもたし、御軍士をあともし給ひ、ととのふる鼓のおとは、いかづちの聲と聞くまで、吹きなせるくだのおとも、仇見たる虎か吼ゆると、諸人のおびゆるまでに、云云。

といへるが如き、又その家を思ひて、
いや遠に里はさかりぬ、いや高に山も越えきぬ。夏草の思ひしなえて、しぬぶらむ妹が門見む。靡けこの山。

と叫び、想像を逞しくしては、

久方の天ゆく月を綱にさし、

わが大君はきぬがさにせり。

といへるがごとき、その文思の富贍にして、しかも雄大なる、凡人の及ぶ所にあらず。

赤人は最も韻致に富みて、詞藻優婉なり。敢て巧を求めざれども、おのづから高妙なるは、眞淵のいはゆるその本心の高きが致すところにして、貴人の正装せるがごとし。かの

和歌の浦に潮みちくれば、瀉をなみ、

あしべをさしてたづなきわたる。

といひ、

百敷の大宮人の、にぎたづに

船乗しけむ、年のしらなく。

といへるがごとき、ありのままに言ひいだせるが、その風姿の高雅なる、いかでまねび得べき。

山上憶良が

父母を見ればたふとし、妻子見ればめぐしうつくし、世の中はかくぞことわり、云云。

などいへる、感情を抒ぶるに長じ、大伴家持が、

海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、云云。

といひ、

(1140—1141)

(1142)

大丈夫は名をしたつべし、後の代に

ききつぐ人も、かたりつぐがね。

劔太刀いよよ研ぐべし、いにしへゆ

さやけくおひて來にしその名ぞ。

などいへる、専ら慷慨壯烈の吟に長じたるがごとき、千歳の後、人を泣かしめ、人を起たしむるものなきにあらねど、なほ山・柿二聖の詞藻優婉なるには及ばず。この二聖は晉に奈良朝の詞藻を代表せるのみならず、實に古今にわたれる我が歌界の聖なり。

そもそも當代は、眞率雄大なりし上代の詞藻に、唐代文藝の粹をとりてこれを融和し、人麿赤人の如き偉人出ててこ

れを彫琢し、長篇短篇その好む所に従ひしかば、宗教・美術・漢文の勃興と相須ちて、かくのごとき美果を結ぶに至りしものなり。(池邊義象)

二六 萬葉集の歌

幸于吉野之宮時之歌

柿本人麿

安見ししわが大君、神ながら神さびせずと、吉野川たぎつ河内に、高殿を高知りまして、上り立ち國見をすれば、たたなはる青垣山、山神の奉る御調と、春べは花かざし持ち、秋立てば紅葉かざせり。遊副川の神も、大御食に仕へまつると、上つ瀬に鵜川を立て、下つ瀬に小網さし渡

安見知之吾大王神長柄神佐備世須登芳野
 川多藝津河内爾高殿乎高知座而上立國見
 乎為波疊有青垣山山神乃奉御調等春部者
 花挿頭持秋立者黃葉頭刺理一云黃葉加射之遊副
 萬葉卷一 十九
 川之神母大御食爾仕奉等上瀬爾鷄川乎立
 下瀬爾小網刺渡山川母依氏奉流神乃御代
 鴨

集 業 萬 版 古

す。山川もよりて
仕ふる、君が御代
かも。

望不盡山歌

山部赤人

天地の分れし時
ゆ、神さびて高く

貴き、駿河なる富士の高嶺を、天の原ふりさけ見れば、わ
 たる日の影もかくるひ、照る月の光も見えず、白雲もい
 行きはばかり、時じくぞ雪はふりける。語りつぎ言ひつ
 ぎ行かむ、富士の高嶺は。

反 歌

田子の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ、富士の高嶺に雪
 は降りける。

思子等歌

山上憶良

瓜食めば子ども思ほゆ、栗食めばまして忍ばゆ。いづく
 より來りしものぞ、まなかひにもとなかかりて、安寐し
 なさぬ。

反 歌

白がねもこがねも玉も、何せむに、まされる寶子にしか
 めやも。

慕振勇士之名歌

大伴家持

ちちのみの父の命、ははそばの母の命、おほろかに心盡して、思ふらむその子なれやも。益荒男やむなしかるべき、梓弓末振りおこし、投矢もち千尋射わたし、劔太刀腰に取りはき、あしびきの八峯踏越え、さしまくる心障らず、後の世の語り繼ぐべく、名を立つべしも。

反歌

益荒雄は名をし立つべし、後の代に聞き繼ぐ人も、語りつぐがね。

修訂新撰國語讀本卷十終

大正三年十二月四日 改訂再版印刷
 大正三年十二月七日 改訂再版發行
 大正六年十月二十三日 修訂印刷
 大正六年十月二十八日 修訂發行
 大正七年一月十日 修訂再版印刷
 大正七年一月十四日 修訂再版發行

定價	卷一、二 各金參拾六錢	大臨	卷一、二 各金四拾壹錢
卷三、四 各金參拾壹錢	正時	卷三、四 各金參拾六錢	
卷五より 各金貳拾九錢	年度	卷五より 各金參拾參錢	
卷十まで	年度	卷十まで	

著者 佐々政一

東京市小石川區大塚窪町八番地

發行者 株式會社 明治書院

取締役社長 三樹一平

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 島連太郎



發行所

東京市神田區錦町一丁目 振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話本局二三九八番

